
未来都市防衛特殊部隊 第7支部

草原美茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来都市防衛特殊部隊 第7支部

【Nコード】

N1118Q

【作者名】

草原美茶

【あらすじ】

時は2050年の夏真っ盛り。

ある一つの殺人事件が起きた。その時はただの殺人事件と取り扱われていたが、その事件は後に大事件を引き起こす。

事件の中心の一つとなる、ある部隊の第7支部の物語。

プロローグ

2050年 8月5日

町は日差しと夏休みの子供たちの熱気で燃え盛っていた。町もだるくなるような暑さでも、事件は起きる。

「どけー！ 邪魔だー！」

そう叫ぶ男の腕には大きなバック。どうやら強盗のようだ。それも絵に描いたような、逆に現実にはいないんじゃないかと思うような、強盗だった。町の人々もいきなりすることに驚き避難する。そんな中、一人のヘッドホンを付けた少年が男に立ちふさがる。

「どけっつってんだろ小僧！ じゃねーと・・・」

「あー うっさいなあ おっさん こんなくそ熱いときに騒ぐなよ。それに今2050年だよ？ そんな 古臭いかった強盗なんて・・・ ますますうんざりだわ」

少年はそのような罵声を男に浴びせた。見ず知らずの少年にそんなことを言われたのだ 男は黙ってはいられない。

「んだとコラァ！ チビッコでも容赦しねえぞ！」

そういうと男は素早く胸ポケットから銃を出し、即座に少年に向けて発砲した。

すさまじい轟音と共に砂煙が立ち込めた。

「ヘッ 子供だと手加減するように俺は温厚にできてねえんだよ お ハハハハッ！！」

「すっげー威力！ 普通の銃じゃないなあソレ」

この少年の声がしたのは、男の真後ろだった。

「ッ！」

男は唾然として振り返る。

「おっさんさあゝ こんなところで普通におっさんと口きくやつが、ただのイケメン少年だと思いますか

？ そんなことマンガでもないでしょおにい」

「・・・今のレポートか」

「オオッ！？ おっさんわかってんじゃないん まあさっきの銃からして、おっさん能力者っぽいし知って て当然か」

その会話を聞き、町の人々はどよめき始める。

「・・・まさかコレって能力者同士の乱闘かあ！？」

一人の町人から発せられたこの一言で人々は叫び、一気に逃げ出す。

「まったくヒデエもんだ 少しばかり器用なだけなのになえ」

少年がため息をついてそういうと、

「よそ見てんじゃあ ねえぞー！！！」

と男が怒り銃を発砲する。

「効かないっての！！！」

「わかってるよ・・・ただこっちはチツとばかり急いでるんだなあ！」

すると男は素早く丸薬を取り出し飲み込んだ。そして、

「じゃーな」

その言葉が聞こえたかと思うと男は光に包まれて消えた。

「ゲッ！！テレポートしやがったあ　しかもこれは遠距離タイプだな。」

あわてて少年が言うと、ヘッドホンのに向かい、

「おい！　東条ちゃん！　アイツどこいきやがった？」

「わかってるって　慌てるな　あー結構遠く行ったな　ホシは他の奴に向かわせる・・・んでおま　えはアジトに向かってちよーだい」

「アイツ　アジトにテレポートしたんじゃないの？」

「別の場所に行ったみたいだ。おそらくホシのグループはいくつかのワープポイントを持ってる。まっ　たくここまで手込んでるのも久々だな。んで今アジトの場所送ったからよろしく。」

「オッケー！　りよーかいっ」

会話が終わると少年はすぐさまスマートフォンのようなPADを出し地図を開いた。場所を確認すると少年の体からは到底想像つかないスピードを出し、走り去って行った。

＊

男はビル街のビルとビルの間に隠れていた。そこは日が照りつけたアスファルトがすぐそばあるとは思わせいような、日陰ができて、とても心地がいい空間だった。

「よし・・・あとは仲間はこのブツを渡せば・・・」

「渡せば何だって？」

安堵している男の後ろから低い小さい声が聞こえてきた。

「ッ！　またかよ・・・クソッ！！」

男はそう言い銃を出し発砲した。発砲したはずだった。しかしそこには音も砂煙も立っていないかった。

「そんな・・・引き金を引いたはずなのに・・・！」

「まあ　とりあえず　そいつは渡してもらう。」

「ッ・・・コノヤロー！！」

男はその謎の人物に殴りかかる。しかし殴った感触がなかった。謎の人物は自分の面影を残したまま、消えたのだ。

「消えた・・・よしでもこれで邪魔ものは・・・！！」

邪魔ものは消えたしかし大切なものも消えていた。盗んだものだ。

「・・・チクショオーーーー！！！！」　　ボタンッ

男はこの後のことを覚えていない。そして覚えることもできない。男はその時死んだのだ。

この事件は最初はただの殺人事件として報道される。しかし、後に起こる大事件の発端になるものだと、今はだれも知る由がない。

- この物語はこの事件に最も深く絡みつくある部隊の第7支部のお話
-

「プロローグ」(後書き)

初投稿です。 お手柔らかにお願いいたします。
プロローグ長くなってしまったと反省しています。 次回からは中心人物一人一人にスポットを当てていくつもりです。
いつ更新するかわからないので、興味を持ってくださった人は、あまり早くの更新は期待しないで気長に待ってください。

プロローグ 水島カケルの場合

「あ……あちい……」

一人の少年が住宅街をだらだと歩いている。彼の名前は みずしま 水島カケル。この後遭遇する事件で犯人を追いつめるが寸のところで逃がしてしまうことになる。

「う……うえーん」

一人の幼児が泣いている。まったくこんな暑いときにうるさいなあ、
と思いながらも笑顔で尋ねる。

「どおしたの？ キミ」

「……グスッ……風船引つかかっちゃった……」

幼児の指をさす方向をみると木に風船が引つかかっているそれは成人男性が手を伸ばしても届かないようなところにある。まして幼児なら届くはずもない。しかしカケルは、

「ちょっと待ってろよお 兄ちゃんが取ってやる。」

そういうと、カケルはポケットから球葉ぐらいの小さな粒を出し、風船に向かい投げた。すると風船に吸い込まれるように粒は風船にくっついた。そう思うかとその風船は木から姿を消し、カケルの手の中に握られていた。不思議がる幼児をよそに、

「はいっ 今度からもう飛ばすなよ」

カケルはやさしい口調で言うと、幼児は「ありがとお!!」と言い走って行った。

（あんぐらいの子供が一番素直でいいな）

彼には幼い時から不思議な力があつた。自分の周りにある「オーラ」を操る能力。「オーラ」はどんな人間でも生まれながらに眼には見えないが持っている。しかし操ることができる人はごくまれだった。今では学者によって「オーラ」の研究が進み、もともと操れない人も訓練しだいで操ることができ、「オーラ」をもとにした機械なども開発されるほどになっている。今ではとても便利なものとされている。

しかし、カケルは、その力が未知の物とされていたときに、知らず知らず使っていた。そのおかげで親に気味悪がれ虐待を受け、学校じゅうで化け物扱いされ、終いには先生にまでも差別を受けてきた。

（あーおれもあんな幼少時代を過ごしたかったな）

あの幼児と別れてから自分の過去を振り返っていると電話の着信音が彼を現実の世界に連れ戻す。

「おい！ 事件発生だ！ おめーが一番近いから悪いけど現場に向かえ！ ヘッドホンしろナビゲートしてやる。」

「おしっ！ OK！」

カケルは素早くヘッドホンを取り出し、耳に当て、ヘッドホンからの声にしたがって走り去って行った。

＊

「どけー！ 邪魔だー！」

時はあの事件に移る。

「どけっつてんだろ小僧！ じゃねーと・・・」

「あゝ うっさいなあ おっさん こんなくそ熱いときに騒ぐなよ。
それに今2050年だよ？ そんな 古臭いかつこした強盗なんて・
・ ますますうんざりだわ」・・・・・・・・・・

＊

カケルは強盗を取り逃がした。しかし、ヘッドホンからの声もあり、それほど心配はしていなかった。カケルが強盗を取り逃がしていなければ、大事件につながることもなかったと知らずに・・・・。

『プロローグ』水島カケルの場合（後書き）

早めの更新になりよかったです。このキャラはだいたい全面に出て活躍する予定でいます。後この感じが2話ぐらい続くので、しつこいかもしれませんが、お付き合いお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1118q/>

未来都市防衛特殊部隊 第7支部

2011年1月16日04時24分発行